

# T・S・エリオットの学位請求論文 『F・H・ブラドリの哲学における 認識と経験』について（1）

今 村 温 之

1911年10月より14年6月までハーバード大学大学院哲学科の博士課程に在籍したT・S・エリオットはその後1年間オクスフォード大学マートン・カレッジでF・H・ブラドリの高弟ハロルド・ジョアキムの指導のもとにアリストテレスの研究に従事した。英国在住を決意したエリオットは1915年秋から16年末までは生計のために7歳から10歳の小学生を対象とするジュニア・スクールの教員となった。これらの期間に準備されたこの学位請求論文は1916年4月に完成をみた。

しかしジョシュア・ロイスをして「専門家の労作」と言わしめたこの論文は最終口頭試問の席にエリオットが臨まなかった為、学位論文としては日の目を見る事無くハーバード大学の記録保管所に保存されることとなった。学問的真理が実存的真理に道をゆずったのである。

さて、この論文たるや「内容的に密度が濃く、実に難解であり・・・謎に満ちて読みとるのに骨の折れる作品」（Richard Wollheim, 'Eliot and F. H. Bradley' in *On Art and the Mind*, p. 222. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1974.）との評もあるごとく、充分にその内容を解釈した上で、それを記述した文献は世界広しと言えども、私の気づく限りでは、一つも出版されていないのが実状である。従って本論稿はこの課題に挑戦しようとするものである。

エリオットの哲学的背景を彼のブラドリ研究に求めるという方針は A・ボルガンによって打ち出されたものである。日本では村田辰夫氏がそうした方針で研究を進められており、既にこの論文の訳を終えられている(『F・H・ブラッドリーの哲学における認識と経験』南雲堂, 1986年6月20日)。この訳には裨益されるところがおおかった。細かなところで私と訳の違いや取り方の違いもかなりあるが、これはさして取るに足らぬことと思う。自分にとって重要と思えることは、この論文は訳してもその論旨を明確にすることができない又はそうすることが極度に難しいということである。従ってわたしの目指すところは非常にささやかではあるが、エリオットの哲学を解明する為の第一歩としてこの論文を要約し、彼の哲学がもつ射程を明かにするための資料とすることである。

## 第一章 直接経験に関するわれわれの認識

本章は認識の出発点たる直接経験 immediate experience<sup>(1)</sup>に関するブラドリの学説を取り扱ったものである。直接経験の解明という目的のもとに、エリオットは経験のなかの直接経験、感情、対象、意識といったものの状態の解明およびそれらの相互の連関の説明を本章において行なっている。直接経験とは経験の根本的中核で、経験の展開のなかで終始根底に留まりつつ、自らを超越して発展するあらゆる展開を自らに繋ぎ止めるものであり、それらの発展を判定するという行為をなすものである。従って直接経験とは以降の諸章に登場する認識上の諸問題を考察するうえでの一般原理としての資格を有するものでもある。

### 1. 経験, 直接経験, 感情

経験とは意識でも主観の属性でもない。それは最初に姿を表わしそれから消えるようなある段階ではなく、終始根本的なものとして根底にとどまる。とどまりながら自らを超越するあらゆる発展を自らの内に含む。総ての発展を内包するだけでなく独自の方法でそれらの発展を判定するという行為をなすものである<sup>(2)</sup>。

直接経験とは感覚でも内観において展開される心象風景でもなければ精神 mind の実体的内容でもない。それは意識のいかなる段階においても、意識の中で現存

したり後から生じたりする他の要素と切り離せる単なる表象ではない。それは感覚と伴でも感覚でもなく、“主観の側の単に感じられる属性でありなんらかの方法で外部世界に関係せねばならない感情の流れ”でもない。またそれは問題に取り組んでいる数学者の精神におけるよりも動物や幼児の精神におけるほうがより純粹であったりより直接であったりするわけではない<sup>(3)</sup>。

感情とは経験、心理学上の感情、精神や意識のもつ感情とは相対的に区別されるべきものである。ブラドリは経験 *experience* と感情 *feeling* とを互いに交換しうるものとして使用する場合がある<sup>(4)</sup>。しかし経験と感情は同一ではない局面もある。感情とは（ブラドリの使う精神的 *psychical*, *spiritual* という語もそうであるが）経験のどちらかと言えば主観的側面を強調したものと取れよう<sup>(5)</sup>。しかしそれは主客の区別と関係が発展する以前の一般的状态であり、心的生活のあらゆる段階に現存し、現存する限りにおいてそれは存在する。したがって現実的なものは如何なるものであれ感じられねばならないのではあるが、それがそれ以上のものでないと考える限りそれを感情と見做すのである<sup>(6)</sup>。

即ち、感情とは主客の区別と関係が発展する以前の心的一般状態であり、心的である限り経験の主観面であるといえよう。また経験とは感情をも内包する最も根本的なものであり、客観方向へと自らを超越しながらも根底に留まるものである。そして直接経験とは客観方向へと自らを超越しながらも根底において留まっている経験のその留まっている局面といえよう。

## 2. 直接経験の矛盾性

さて、われわれはれは以上のごとき直接経験を経験の一段階として取り出すことができるのであろうか。発生論的視点からすればそうした段階はあるとせざるをえないのであるが構造形式的視点からすればそうした段階はなく、あらゆる経験の認識には総ての構成要素（感情と思考、表象、復原作用、抽象など）が見いだせる。二つの視点はそれぞれ有効ではあるが絶対ではない。答はそうした段階があるのでもなければ、ないのでもない。ともかく観念的構成と対照された直接経験があるのであり、これはある意味では時間において観念的構成に先行するの

である。しかしながら如何なる実際の経験も決して単に直接的ではありえないのである<sup>(7)</sup>。

また経験されているもの或いは所与のものと構成されたものとの間、即ち実在的と観念的との間に明瞭な一線を引く絶対的視点は決してない。あらゆる区別は相対的で変動する一つの視点からなされるもので、その外側では有効でない<sup>(8)</sup>。

われわれの用語も非実在的抽象に過ぎない。しかしながらわれわれの用語はあらゆるわれわれの実際の活動に間接的に意味されている認識理論を表明しているのであるから、ある種の実在性と正当性をそうした用語に与えられるし且つそうした用語を擁護し得るのである<sup>(9)</sup>。

経験のみが実在である。しかし総てが経験しうる。ということは、それぞれの経験には実在性のそれぞれの度合いがあるということであろう。ところが、最高度の実在性を持つと想定し得る直接経験は認識の基礎であり目的であるが、いかなる経験も単に直接ではない。実際の認識は直接経験とは多少とも異なる感情に基づき、感情から発展するのであり、直接経験を対象として直に認識できないのである<sup>(10)</sup>。

しかしわれわれは推論により直接経験にいたることが出来る。直接経験はわれわれの認識の出発点である。なぜなら認識とその対象が同一なのは正に直接経験においてのみだからである。このところの思考と思考されたものの同一性の主張は認識における主観の形式の役割を重視する近代的真理観と異なるアリストテレス的真理観に通じるものと著者は考える。このようにわれわれは直接経験をある程度対象化できるのであるが、と同時にそれは他の対象と同種の対象ではないのであり、他の要素と関係しうる構成要素ではない<sup>(11)</sup>。

にもかかわらずわれわれは直接経験から引き出される構成要素を用いざるをえない。即ち直接経験を主観や客観の属性として扱わざるをえない。つまり“わたし”の経験ないし経験された世界としてあつかわざるをえない。ところが“わたし”とは経験から構成（抽象）されたものであり、客観の属性なるものも経験からの観念的構成体に他ならない。要するにわれわれは経験を一方から論じたり他方から論じたりしつつそれらの部分的見解を是正しうるにすぎない<sup>(12)</sup>。此処に解

積学的循環があることは重要であると著者は考える。

### 3. 感情の矛盾性

次にエリオットは感情の分析に入る。先にも述べたとく、われわれは直接経験を対象として直に認識できないが推論によりそれにいたることができるのであり、ある程度それを対象化できるにすぎないのであった。またそれにもかかわらず直接経験のみが真の实在であると言えるのであった。ところが“この直接経験のみが純粹の实在であるという局面”と対比的に感情は“实在の無矛盾的局面<sup>(13)</sup>”ではないのである。にもかかわらず实在は感情や知覚の中でわれわれが遭遇するものであるが<sup>(14)</sup>。即ち、先に述べたとく認識は感情に基ずき、感情から発展するのであり、しかもわれわれは実生活において事物を認識しつつ生活せざるをえないのであるから感情は実際性においては直接経験より意味があるともいえよう。

感情は大雑把に一方では知覚と思考、他方では意志と欲求の二大様式に分析できる。更に美的態度、苦楽といった局面に分析できよう。しかし分析以前は“こうした諸局面に未だ全く分化していない総体的 total 精神の一般状態”なのである。無論と同時に“内部的に未分化の統一を持った（経験の）特称的状态<sup>(15)</sup>”でもある。総体的精神そのものが实在なのではなく経験からの抽象だからである。したがって感情は实在の無矛盾的局面ではないのである<sup>(16)</sup>。

エリオットは感情は实在の無矛盾的局面ではないことの説明に入ってゆく。要するに此処のところの理由はこうである。諸感情 feelings は一方では直接経験と同じ本質をもつが他方では他の対象と完全に異なるものではない、即ち一方では实在であるが、他方では实在からの抽象であるというのである。

こうした理由との関連でエリオットは以下の諸点を述べる。

単なる感情は対象の世界には位置付けられない。対象として表現された“単なる感情”は経験からの抽象である。単なる感情、即ち完全で充足した全体的 whole 感情は拡大して対象となったり、対象に関する感情 feelings を持った主観になったりしない。そこには如何なる意識もない。しかしそれがいやしくも感情である限りそれは意識的でなければならない。そしてそれが意識的である限りそれは単

なる感情であることを停止するのである。感情とはこうした矛盾を持っているのである。それは認識における矛盾を含んだ局面なのである<sup>(17)</sup>。

「一方において感情は実在からの抽象であるが、他方において感情が特称化して成る対象は対象自体では説明のつかないこの感情とのある種の合一をもっているものであり、感情と対象は相互に融合しており単に感じられる背景を背にして現われているのである。そしてそこから絶えず補完を求めているのである。こうした発展——即ち、思考、意志、苦楽、対象——が可能となるには、感情が与えられねばならない。そしてこれらの発展が現成したときには、感情は拡大し変質しこれらのものを包摂するのである。(＜拡大し変質しこれらのものを包摂した感情はこれらの要素の集合体ではない。＞此処のところを『真理と実在』<sup>(18)</sup> 175頁には次のように説明されている。“あらゆる瞬間に私の状態は、たとえそれが他の如何なるものであるにせよ、私が直に気付いている一つの全体である。それは経験されている一における多の非関係的統一である。”) こうしたことが感情は自己超越的であるということによって意味されていることである。<sup>(19)</sup>」

ともかく感情は自己超越的矛盾を有するのである。

感情の自己超越は単に精神 souls の歴史における出来事で外界の歴史における出来事ではないと考えるのは間違である。なるほど経験は他の如何なるものよりも実在的であるが、如何なる経験もその経験の外側にある実在的なものを指示することを必要とするからである。世界の歴史は一方においてわたしの経験の歴史ともいえようが、わたしの経験自体が観念的構成であり、それはその外側の多くのものの存在を必要とするのである。いわゆる外部世界は感じられることに依存しているのである<sup>(20)</sup>。

感情 feeling においては主客は一体であるが、その客観は有限の中心の外側にある他の感情 feelings と連続していると感じられることによって客観となり、その主観はその客観と関係してない感情 feeling の中核と連続していると感じられることにより主観となるのである。そして何処で主客を分離する線を引くかは常に部

分的實際的関心が決定すべき問題である。これを決定すべき絶対的視点はないのである<sup>(21)</sup>。

感情は主客一体だから時間の外にあり歴史を持たない。それは比喩的に瞬間にあるとしかいえないであろう。主観の側を想定すれば客観の側の歴史とならざるをえないし、客観の側を想定すれば主観の側の歴史とならざるをえないのである。

「時間のなかには、主客の二面があるが、そのどちらも真に安定し独立してはいないし他方の基準となりはしない。どちらか一方が如何にしてそうしたものになったかを考えるには、他方に人為的な絶対性を付与せざるをえないのである。……われわれの認識論にあっても、直接経験の瞬間を離れるならば、われわれの説明は環境における精神 mind の歴史として呈示せざるをえないか、または精神に現われる世界の歴史として呈示せざるをえないのである<sup>(22)</sup>。」

直接経験を記述する際には主客いずれかを微妙に暗示する用語を使用せねばならない。表象といえ、その表象が呈示される主観を対象として考えてしまう。そして感情といえ、対象に関する主観の感情としてそれを考えてしまうのである。しかしこのように感情を考えることは感情を別種の対象<sup>(23)</sup>とすることなのであり、これについては第三章において考察されている。したがって感情 feelings は対象世界における真の対象であるが、直に感じられているという感情の本性に参与することによって、他の対象と異なるのである。即ち感情と呼ばれるのである<sup>(24)</sup>。

対象となっている感情は対象となる際にそれ自体を超越する諸関係を発展させたために拡大し発展している。しかし既に意識の対象となっているために意識より広くはなく狭いのであるから収縮し衰弱している。収縮し衰弱しているからといってどの段階においても意識の全内容となっているわけではない。また感情は終始ある程度の対象性を持っているのだが、それ故にその分だけ強密性に欠けるというのでもなければ、注意のもとにあるからといって消滅してしまうわけではない<sup>(24)</sup>。

エリオットはまた感情の自己超越的諸関係を感情の“なに性” whatness と呼び、

感情の直接経験としての単に存在する局面を“それ” that と呼んでいる。もっとも“それ”といっても、どの場、どの時にあるともいえないものではあるが。

「あらゆる対象の、また当然のことながらあらゆる感情 feelings の、この単に存在する局面こそがわれわれの言う直接経験なのである。この直接性の、即ち裸の存在の局面こそが、(それら自身へと)もっとも限定された場合の感情 feelings の特徴なのである。もっともそうした感情 feelings はまたあらゆる瞬間に意識の対象でもありえよう。したがってわれわれの感情 feelings は一方においては直接経験とおなじ性質を持つものであり、他方においては他の対象と全く異なるものでは決してないのである<sup>(26)</sup>。」

したがってエリオットにあつては whatness と that ( this ) とのあいだを循環しながら裸の存在を解釈するという課題が生じてくる。われわれは経験を一方から論じたり他方から論じたりしつつ、それらの部分的見解を訂正してゆかざるをえないのである。

感情は対象となっているかぎりでは、それは他の対象と同じ基盤に立っており、意識から独立して知られるものである。しかしまた、それは単に感じられる限りでは主観的でも客観的でもない。(愛憎といった)感情がひたすら感じられているといえるわたし自身の視点にその感情が忠実ならば(即ちわたしがその感情を意識していないならば)その感情は主観的では(また客観的でも)ありえない。というのはその感情は存在するとは決していえないからである<sup>(27)</sup>。

では誰にとってわたしの感情は主観的なのかといえ、それは同じ対象を異なる感情で見ながらその対象からわたしの感情を差し引いてその感情をわたしの精神に存在する分離し独立したものとする冷静な観察者にとってである。この観察者が主観的と考えるわたしの感情とは、わたしにとってはあるがままの全世界であり、主客分離以前であつて客観的でも主観的でもない、しがって唯我的でもないのである。ある感情が持続し意識に行き渡っている限り、その内容全体からある部分を切り離しそれを対象と呼び、残りを私的な感情と呼ばねばならぬ理由は



ない。感情 feelings ともの things が分離させられるのは社会的行動においてのみ、即ち有限中心間の葛藤と再調整においてのみである。共同世界は感情における主客分離の側面において必然的に要請される事に注目する必要があると筆者は考える。さらに感情とものはこのように分離したあとでも曖昧模糊とした切断面を残しつつ一体化する傾向がある<sup>(28)</sup>。

したがって如何なる認識においても対象とそれを把握するものとの間には実際的分離以上のものはけっしてありえないのである。対象は経験を背景に浮き上がっているのであり、われわれの経験 our experience の外側にある関係をもってはいるが、それはまた経験からの抽象であり絶えず付加や削除がなされているのである。このように感情が対象になったり、対象が感情になったりする不断の推移の重要な一例は感覚による錯誤であり、感覚の矛盾の解消は感情が新たな対象に同化する過程ないしは対象が感情に同化される際にみられる<sup>(29)</sup>。

以上のごとく対象と感情を直ちに区分するものはないのである。したがって実在の状態とは決して対象として完全に定義もされなければ感情 a feeling としても完全に享受できない経験 an experience のことなのである。その経験においては観察された構成要素の如何なるものも対象ないし感情の何れかの局面を呈するのである<sup>(30)</sup>。

#### 4. 矛盾的局面間の同一性

エリオットは次に、ならばこうした推移に同一性は存続するのか、即ち感じられた感情と観察された感情はどの程度同一であるかを問う。通常の場合の同一は対象と対象の、即ち注意の先端と先端の同一である。この場合の同一は対象化された感情と感情同志の同一ではなく、対象であるものと対象でないものとの同一なのである。感じられている感情と対象化された感情との間には対象的相違によって妨げられることのない連続があるのであったから、そうした相違が全く知覚されないかぎり、これらの二者は同一であると想定してよいのである。内観は(関係や関数の) 項 terms を与えるだけであり過程を与えるのではないのだから心理学が過程とものとの間に實際上明確な境界線を設定し、過程を科学の対象として

探求しようというのならば、それは矛盾と言うものである<sup>(31)</sup>。

しかし過程とか感情や単に感じられたものから対象化されたものへの推移とかは全く認識できぬものとは言えない。推移は飛躍ではない。それは多少とも意志された変化である。感情への注意はそうした対象が現存するということ、およびその注意がその対象を製造したのではない<sup>(32)</sup>ということをも前提にしているのである。感覚や感情に注意するさいに、注意において感じられる変化以外にもなんらかの変化に気付くとするならば、その変化はそうした感覚や感情の質であると考えうるし、そうした注意から独立したものと考えうる。また注意とは異なる如何なる変化にも気付くことがなければ、それとは異なる如何なる変化も無意味であるといえよう<sup>(33)</sup>。

感情より対象への変化の過程や推移に関する問題の根本的的局面は感動 emotion にある。感動とは感じているものが対象となっているもの、感じられているものが観察されるものとなっているもののことである。

「感動の一部分は対象 objects 即ちわたしの精神の前におかれた知覚 perceptions や観念 ideas から既になっている。さらに、感動全体は一つのものでありながら、感情の特殊な一群がわたしの精神の前におかれたこれらの対象と結合しているのである。对象的にではなく<sup>(34)</sup>全体的かつ直接的に結合しているのである。…われわれの感動の対象部分にさらに知覚や観念が加わってその部分が拡大されると、感じられているものとの一致ないし不一致はあらゆる要素に行き渡るのみならず、その対象を通過した先にある特殊な感じられた一群にも見いだされるのである。従ってこの対象との特殊な連結や連続が、要素を付加することによって感じられたものから観察されたものへと更に変形することが如何にして可能かを説明するものであると私は考える。感情には（此処が重要なのだが）ある意味で既に対象に属し、対象と一体であるという特徴があるのだ。なぜなら感動は対象と感情の両局面を含み統合しているからなのである<sup>(35)</sup>。」

とブラドリの言葉をエリオットは引用して見えないものから見えるものへの、即

ち感情より対象への推移と両者の連続性とを説明している。従って一般的にであろうと如何なる特殊な瞬間においてであろうと享受と観想を截然と区分することや、感情と対象の区別を科学的な区分であり得るとすることが誤りなのである<sup>(36)</sup>。

## 5. 経験における関係とその矛盾

此処に至ってエリオットは経験における感情、思考、対象の状況（関係ではない）の分析に入る。

先ず経験は非関係的である。関係は（関係や関数の）項と項の間にだけ通用するものである。しかもこれらの項はそれ自体が項ではない経験 an experience という背景を背にしてのみ存在しうるのである。ところがそれと同時にわれわれは経験の内部に常に関係を発見するのであり、この意味で非関係的経験は存在しないといえよう。しかしまた、こうした関係が経験ではないのである。これらの関係が経験され、それ故に実在的である一方、これらの関係は関係として実在的なのではない。これらの関係は、まさに関係として、実在にとり本質的とおもえるのである。感情 feeling には内容があるがこの内容はそれ自体の内部では矛盾があるという状況が、新たな構成によってわれわれをより大きな感じられる全体へと至らしめるのである。ところがこうした新たな一全体のなかにも同じく厄介な項と関係が現出するのである。如何なる経験もそれ自体では無矛盾ではない。なぜなら経験には徹頭徹尾観念的局面が存在するからである。それでいてこれらの観念的局面は同様に実在的であり、それら自体が感じられた背景より現出するのである<sup>(37)</sup>。

## 6. 経験における意識とその矛盾

次にエリオットは経験のなかの意識の位置についての考察にはいる。感情が一方において実在的な単なる感情と連続し、他方において意識され対象化された非実在であらねばならぬという矛盾を持っていたのと同様に、意識も亦実在の無矛盾的局面ではない。経験は意識と同一の広がりを持ってはおらず、それよりも広い。知識がそこから始まる、認識と存在が一体の直接感情は主観や客観以上のも

のであり、それら双方を内包している。ところが構成体としての意識を持った主体は一部分が感情全体の外側に出ている。すなわち意識主体は感情よりも小さいにもかかわらず、その外へはみ出るという矛盾を持つのである。「有限の内容は必然的に外側から決定されるのである<sup>(38)</sup>。」従って意識は直接所与であるとともに、それが直接経験を越えたところにもあるのでなければ直接経験のなかにあるとはいえないであろう。意識はものではなくて実在の局面、しかも矛盾のある局面なのである<sup>(39)</sup>。

経験は意識ならぬものに始まりそこで終わる。だがこの“意識ならぬ”とは“無意識”のことではない。われわれが無意識と称するものは経験のなかの一要素にすぎないのであり、それは経験のなかの他の諸要素と対照的に生じるのである。無意識はわれわれの意識的活動を導いたりまたはそれらに影響を与えるある種の想定上の心的なものを指しているのである。そして無意識的なものが意識的なものと対照される限り、それは他の対象と同じ対象なのであり非感情的なるものなのである<sup>(40)</sup>。

## 7. 意識と対象

始まりにおいては意識とその対象は一体である。瞬間においてはこれら両者の間には如何なる区分もない。中性の所与があり、それがコンテクストによって意識ないしは対象の側に決定されるのである。このコンテクストなるものはブラドリが「有限の内容は必然的に外側から決定されるのである。」と述べるときに語っているものである。このコンテクストによる、即ち外側からの、決定は無数にある。一方においてはわたしの現在の身体的構造や状態があり、これが経験内の一要素となることなく、即ち経験を超越してその経験を決定するのである。さらにわたしの身体の歴史又は一連のわたしの意識的諸経験として考えられるわたしの全過去がある。もっともこの場合、わたしがそれらのものを経験内の対象から分離させ、即ちそれらを経験から超越させ、それらを私自身の属性として考える限りのことではあるが、他方において対象の本質とか関連がある。これらは経験の現在の瞬間の外側にあり、即ち経験を超越しており、更に注意深い細かな検査

によって発見されるのである<sup>(41)</sup>。

このように一方に主観、他方に客観を発展させるにつれて、両者は次第に独立してくるようになるのである。一方において魂（精神 souls）や自己 selves を得、他方において形而下の（物的）宇宙を得るのである。しかし意識も対象も本来は経験に依存している局面を持つのであるから、意識は対象に依存し、対象は意識に依存するという考え方は断固拒否するものである。やがてわかることだが、意識は対象間の関係に還元しうるし、対象は様々な意識状態の間に関係に還元されうるものであり、一方が他方に依存して生じてくるといったものではないのである。また一方の視点が他方よりも絶対であるともいえない。また世界を意識と対象に分割したあとで、世界を一体化しようとしても決してうまくいかない。われわれは経験から分離抽象したものから経験を創造することはできないのである<sup>(42)</sup>。

## 8. 経験における同一性

それにもかかわらずこうした観念的な関連が、経験の直接的統合をうちやぶり、なんらかの方法で経験のなかに入り込まぬかぎり、われわれは全く意識的ではありえないだろう。しかしながらそれでもなお元々の統一体、即ち中性のものは、超越されているにもかかわらず依然として残っており、決して分析しつくされることはないのである<sup>(43)</sup>。

この直接的同一性の契機は単に“わたしの経験内において”本質的であるだけではない。それは経験の直接性のなかでの同一性なのである。わたしの存在は対象が現出する経験に依存し、対象の存在はそれが感情のなかでわたしと合一していることに依存している。対象を如何に説明しようとも、対象が現出してくる経験という状態のもとでその対象が存在していたということが、その説明にとって本質的なのである。例えば実在の花なるものはそれが与える影響、即ちそれが他のものに与える実際の影響、の総計といえよう。しかもこうした影響は経験においてのみ現実的なのである。そしてこの総計は一つの体系を形成せねばならない、すなわちなんらかの方法で無矛盾であらねばならないのである。もし経験のなかでのみ現実的であるこのような効果以外の实在性をその花に与えようとするなら

ば、われわれは花自体に関する花の経験へと投げ返されるのである。即ち汎心論の立場に立たされるのである。しかし主客が常に相対的であるところで、その相対的客体をさらに相対的主客において考察する必要はなからう<sup>(44)</sup>。

## 9. 直接経験に関する結論

ここにおいてエリオットは直接経験に関する結論に至る。唯一独立の实在は直接経験ないしは感情である。实在としての感情は自己充足し、それ以上の補完を必要としない。“わたしの”感情はたしかにある意味でわたしのものであるが、それはわたしがその感情で“ある”からなのである。わたしの存在はわたしが経験ないしは感情で“ある”ということにある。しかしわたし自身の感情は悟性的には他者の方がよく理解出来るのである<sup>(45)</sup>。

直接経験は無時間的な統一体であり、それ自体は何処にまた誰に現存するものとはいえない。時空及び自己が存在するのは対象の世界においてのみである。経験が直接性と調和と無矛盾性を失うと、われわれは自分が対象世界のなかの意識的精神 souls となっていることに気付くのである。単なる経験が始めにあり完全な経験が終わりにあるという、また全てを内包する経験という考え方は、究極的にはわたしの信念である。もっともブラドリ氏は「完全な非識別的非関係的全体<sup>(46)</sup>」という彼の考えを彼の信念に基くとは主張しないであろう<sup>(47)</sup>。信念の問題においてエリオットはブラドリの哲学と袂を分かつのである。

註 T. S. Eliot, *Knowledge and Experience in the Philosophy of F. H. Bradley*. London: Faber and Faber Limited, 1964. を *K & E* とする。

- (1) 西田幾太郎の“純粹経験”と同じと考えてよい。西田が F. H. Bradley を読んでいたことは彼の日記からも明らかである。しかし両者の関連は未だ証されていない。
- (2) *K & E*, pp. 15-6.
- (3) *K & E*, pp. 15-6.
- (4) *K & E*, p. 15.
- (5) *K & E*, p. 19.
- (6) この段落は *K & E*, p. 16. において述べられていることである。

- (7) *K & E*, p. 16-8.
- (8) *K & E*, p. 18.
- (9) *K & E*, p. 18.
- (10) *K & E*, p. 18.
- (11) *K & E*, p. 19.
- (12) *K & E*, p. 19.
- (13) F. H. Bradley, *Appearance and Reality*, p. 407. Oxford: Oxford University Press, second edition ( with an appendix ) 1897.
- (14) *K & E*, p. 20.
- (15) *Appearance*, p. 405.
- (16) *K & E*, p. 20.
- (17) *K & E*, p. 20.
- (18) F. H. Bradley, *Essays on Truth and Reality*, p. 175. London: Oxford University Press, 1914.
- (19) *K & E*, pp. 20-1.
- (20) *K & E*, p. 21.
- (21) *K & E*, pp. 21-2.
- (22) *K & E*, p. 22.
- (23) *K & E*, p. 22. 第三章で半対象 half-objects と呼んでいる。
- (24) *K & E*, p. 22.
- (25) *K & E*, p. 23.
- (26) *K & E*, p. 24.
- (27) *K & E*, p. 24.
- (28) *K & E*, pp. 24-5.
- (29) *K & E*, p. 25.
- (30) *K & E*, p. 25.
- (31) *K & E*, p. 26.
- (32) フッサールにあっても志向点としての対象は心理学的主観による勝手な産物ではなく、対象は志向体験のうちに生じてくるものであり、既に現存しているものがある視点から再確立されると考えられる。
- (33) *K & E*, pp. 26-7.
- (34) “客観的に”とも訳せよう。objective は対象的と客観的とに截然と区分できない場合もある。
- (35) *Truth and Reality*, p. 169.
- (36) *K & E*, p. 27
- (37) *K & E*, pp. 27-8.
- (38) *Appearance*, p. 407.

- (39) *K & E*, p. 28.
- (40) *K & E*, pp. 28-9.
- (41) *K & E*, p. 29.
- (42) *K & E*, p. 30.
- (43) *K & E*, p. 30.
- (44) p. 30.
- (45) *K & E*, p. (31).
- (46) *Truth and Reality*, p. 188.
- (47) *K & E*, p. 31.

本研究ノートは横浜商科大学学術研究会平成二年度研究助成によるものである。